

り、かゝる会を催す折には、かくの如く、多数の方がお集まり下さって、共にこの句帖の出版を喜んで下さる。これを思へば、我儘者であり疍癩持である水巴君には、他に何かい、ものを持つてゐるに違ひない……」云々と、賑かな拍手を呼んだ。主賓の第一句集「水巴句集」に、「分けし根の菊に昔の心かな」の賛をされた鳴雪翁、今宵の翁はさぞ満足に在さう。

鳴雪翁の前から楽天氏が起つ。氏の音声は少しく低く、殊に我等には後ろ向の位置であつたので、充分聴取れぬのは残念ながら、時折、「句帖の序文を見るに、水巴君はなか／＼新しい人である」「今夕の会は、かゝる方面の水巴君には、却つてふさはしいものである」などと聞こえて来た。

続いて起つたのは、文壇の人万太郎氏である。

「わたくしはもう、今晚この席へ連なりましては、丁度、放蕩息子が久しぶり、家に帰つたやうな心持でございます。今晚は、ただ黙つて、みなさんのお話を聞いて、その心持ちでやりたいのでございませ……」と、感慨の口調で、坐に復す。

高浜先生が起られた。が、その頃は、先生が鎌倉への汽車の時刻も迫つてゐた、め、たゞ簡単に今宵の宴を祝し、「依つて、今は、水巴君の感想を聴きたく思ふ」と、主賓を促す。

主賓がすつくと起られた。満堂の視野の中に、主賓らしい挨拶がある。

玩亭氏が、「門弟として……」と起つた。すでに氏の顔は、酔と喜びに赤かつた。「水巴句帖の出版された事は、私共にとつては、実に太陽が昇つた思ひがあります」と、我等の心を代つて述べた。

弧軒氏が再び起ち、みんな席を起つて、主賓の為に乾盃した。宴は果て、も、まだ夜はなか／＼に浅い心持、別室に移つて、食卓を

囲んで話すもの、露台の夜風に笑ふ者、同じ心が和んでゐた。

印象ありのま、

- 何ともいへない親しみや気安さが、隅々までたゞよつてゐたこと。
- 主賓の挨拶が、減法うひ／＼しかつたこと。
- 鳴雪翁が、随分喜ばしさうに居られたこと。
- ま、ごとみたいに、小さな猪口をさしつけて、大嫌ひな「まあ一杯」「まあ一杯」をやられなかつたこと。
- 假善請のせいでもあらうが、会場の天井や柱が、ひどく安っぽく、楣間の巨大な額がつまらないものだったこと。
- 万太郎さんの演説が、朗読みたいで、ほんとに感慨無量であらうと思へたこと。
- 匏瓜さんが、何時見ても、ちつとも変らない容子でホカホカ歩いてゐたこと。
- 零餘子さんが見えたことは、いろ／＼な意味で自分だけには感謝されたこと。
- 高浜先生が、一足先にお帰りがけ、玄関でボーイから、丸まつちい大きな風呂敷包を受取つて無雑作に抱へなかつた時、「十五代將軍」の中の大鞆の処を思出して、何だか胸が逼つてしまつたこと。

※ ※ ※